はまぼう学府新たな学校づくり検討会議事録

■第１回　はまぼう学府新たな学校づくり検討会

１　日　時　令和８年 10 月 29 日（木）　18 時 30 分～20 時 35 分

２　場　所　福田支所　大会議室

３　出席者　委員 20 名（うち代理出席１名）

柳澤要委員、黒柳加代子委員、大石美聡委員、鈴木陽介委員、横山佑紀委員、鈴木那奈子委員、田中潤委員、鈴木秀和委員、柏木將生委員、大杉貞博委員、土井勝利委員、千葉義徳委員、小嶋久典委員、宮本武彦委員、渥美玲子委員、松尾真里委員、二橋直美委員、後藤理英子委員、内野順子委員

代理出席：金子佳代子氏（福井智美委員の代理）

事務局　磐田市教育長、磐田市教育委員会事務局教育部 学校づくり整備課

磐田市企画部 資産経営課、磐田市自治市民部 自治デザイン課

株式会社地域計画建築研究所（アルパック）

４　内　容

（１）委嘱状交付

委員を代表し、柳澤要委員に教育長から委嘱状を交付した。その他の委員には席上で委嘱状を配付した。

（２）委員自己紹介

各委員が氏名、所属及び本検討会に臨む思い等について自己紹介した。

引き続き、事務局が自己紹介した。

（３）開会

（４）教育長あいさつ

皆様こんばんは。お忙しい中、検討委員を担っていただきありがとうございます。皆様とはまぼう学府の将来像について議論できることを楽しみにしています。

昨年、地域づくり協議会よりはまぼう学府小中一体校建設に係る要望書をいただきました。また、地域で意見交換会等を開いていただき、それぞれの立場で参加いただいています。改めてこれまでのご尽力に対し感謝申し上げます。

いよいよ、基本構想に向けて具体的に検討する場となりました。ながふじ学府、向陽学府に続いて、磐田市としては３校目の学府一体校となります。これまで平成 27 年度か

ら、新たな時代を見据えてどのような学校をつくっていくべきかを検討してきましたが、「人と人とのつながり」が重要なキーワードとなります。人口減少や少子高齢化、様々な技術革新などで将来が見通せない中、どんな学校が必要かという議論をしてきました。また、社会教育施設等も併せた多機能型学校となることで、地域の皆さんと学校のこどもたちがつながり、こどもたちの社会性が養われるなどへの期待があります。

福田地区、はまぼう学府でどのような学校を作っていくか、学校を核とした地域づくりのためお力をお貸しください。よろしくお願いします。

（５）検討会の目的　事務局より

本検討会は、はまぼう学府の児童生徒数の変化、既存学校施設の老朽化、地域から提出された要望書等を踏まえ、地域、保護者、教職員及び専門家等の意見を反映しながら、学府一体校等整備基本構想・基本計画の策定を進めるための会議体である。

検討会の定員は 20 人以内とし、会議は過半数の出席で成立する。原則公開とし、傍聴を認め、発言者個人を特定しない形で議事録を公開する。

基本構想では、学校づくりのコンセプト、学校規模、必要諸室や施設配置の考え方等を整理し、基本計画では、その条件を踏まえて施設配置、平面計画、事業スケジュール、事業費等の検討を進める。本検討会は基本構想・基本計画策定までであり、その後は、基本設計、実施設計、建設工事へと移行する。

（６）会長及び副会長の互選

事務局：会長に柳澤要委員（千葉大学大学院教授）、副会長に田中潤委員（福田地区地域づくり協議会連絡会会長）を推薦したい。

全委員：挙手による全会一致で了承。

事務局：柳澤要委員を会長、田中潤委員を副会長に選出し、以降の議事進行を会長に依頼する。

（７）磐田市の目指す教育について【報告事項①】

事務局から、はまぼう学府の現状や学府一体校の考え方、多機能型学校の事例等をまとめた「磐田市の目指す教育」についてスライドを説明。９年間を見通した小中一貫教育、コミュニティ・スクール、学府一体校の考え方及び施設の形態についての資料２は別途参照いただく。

＜質疑応答・意見交換＞

会長　：要点としては、児童生徒数の減少や施設の老朽化という背景がある。その中で、磐田市としては小中一貫教育を進めて来ており、コミュニティ・スクールの取

組として地域に開放していくことや多機能型学校として学校と地域で相互にメリットをいかしていく考え方が示された。幼小中の連携、学府一体校のＡ型・Ｂ型のあり方についても意見を伺いたいということになる。ただいまの説明について質問や意見があればお願いしたい。

委員　：数年前から学校運営協議会の小中学校だけの議論では足りないと言ってきた。小中学校の９年間の充実のためには、乳幼児期からの育ちが重要である。福田こども園が近接している立地を生かし、幼児教育や子育て支援との連携を充実してほしい。

事務局：学びに加えて子育ての観点も重視している。福田こども園や子育て支援センターでは就園前のこどもや保護者への支援も行っているため、こうした取組との連携についても検討いただきたい。

会長　：こども園と小中学校が一体となる計画を千葉で計画してきた。また、札幌の中心部では、学校を統合してこども園や子育て支援センターと複合化した例もある。複合化することで、学校の先生とも連携しこどもの特性などを共有されている。小中一貫のみならず、就学前のこどもから、保育園や幼稚園に上がる前のこどもたちにも目を向け、一貫した視点をもっても良いと思う。

委員　：多機能型学校では、交流センターや図書館のような公共施設だけでなく、銀行や病院など公共性のある民間施設を併設することも考えられるか。市の考え方と他地域の事例を伺いたい。

会長　：子育て支援センターや図書館などの公共施設の併設する例が多く、学校にとって学びの機会となるメリットを享受できる施設が多いと思う。民間施設と融合する例は国内では少ないが、京都の都市部の学校では、地域に貸し出すレンタルスペースを用意しておりレストランやお店などが入っていた。食育など学校への貢献なども配慮し、賃料を低減するなどの取組がある。事例はあるものの、国内では少ない。公共施設であっても管理面などのデメリットもあるのでハードルは高い。市役所や図書館などであれば民間施設の併設もあるが、教育施設ではセキュリティ面で難しいところがあると思う。

事務局：現段階では学校と公共施設の複合化を中心に考えている。小中学校の機能を基本に、どのような施設や機能が適切かを今後協議していきたい。

委員　：公共施設との複合化により不特定多数の人が出入りすることになる。こどもの安全とセキュリティを最優先に考える必要があるが、どのような対策が考えられるか。

会長　：複合化では、学校と一般利用者の動線・利用エリアを建築的に分けつつ、運用面で必要な交流を図る方法がある。図書館を併設する場合、学校側から利用で

きても一般利用者は学校側へ立ち入れない動線を設ける例がある。管理者、利用時間、休日の責任分担など、教職員に過度な負担がかからない仕組みも重要である。

事務局：事例紹介した小学校のように通用扉等に管理をしている例もある。また、地域の大人の目をこどもの安全確保に生かす考え方がある。

会長　：志木小学校では一般利用を主に１階に限定し、学校側の利用動線を分けている。図書館の利用も教員の引率など運用上の工夫があり、交流と安全性を両立させている事例と考えられる。

委員　：現在も学校と地域のつながりを大切にしており、Ａ型の一体校の方式でそれが促進されることには期待している。福田小学校の案は津波の心配も軽減され良いと思う。小学生と中学生がともに生活することで、中学生も人に頼られ、成長する経験が生まれる。せっかくやるのであれば、既存の学校観にとらわれない、未来のこどもたちの生活スタイルに合わせた良い学校にしてほしい。

会長　：市内での先行事例やその課題を参考にしつつ、今だからこそ実現できる未来型の学校づくりの機会と捉えたい。

委員　：Ａ型を希望する子育て世代の声がある一方、豊浜小学校には小規模校ならではの良さがある。小規模校だからこそ教員の目が届き、自己肯定感が高く意欲的な児童が育っていると感じる。豊浜小学校を残したい思いもあり、小規模校の良さは何人くらいまでと考えるか。

会長　：豊浜小を含みＡ型にするという考えがあると思う。ながふじ学府の場合、Ｂ型となったのは、規模が大きくなりすぎることにある。適正な規模を検討した方が良いと思うが、規模が大きくなるのであれば別々に造っていくということも考えらえる。例えば、小田原市では小規模校が残っていくことをどうするかルール作りを考えている。ただし、文部科学省では適正規模を２～３学級でクラス替えができる考えとしており単学級は好ましくないと思う。単学級になるとデメリットも増えてくるし、教員の負担もでてくるので、一体的に考えていくのが順当と考えられるが、様々な考え方があり、小規模でも特認校として残していこうという取り組みもある。

事務局：今の豊浜小学校を見ると小規模校の良さも認識している。全国的な動向や文部科学省等の考え方も参考としつつ、委員一人ひとりの意見を伺い、学校の形態を検討していきたい。

委員　：豊岡東小学校があった時には、１教室で２学年の授業をする複式学級だった。将来、児童数が減った場合の複式学級の基準や、複式学級となったときの学びへの影響についても、保護者に分かりやすく説明してほしい。

事務局：複式学級については、今後の会の中で詳しく説明していく。２学年を合わせて16 人という基準があり、一人の教員が２学年の授業を交互に進めることになる。学年内での話合いや人間関係の広がりなどに課題が生じる可能性がある。

会長　：複式学級や単学級については慎重に考える必要がある。１学級の人数と複数学級の維持の両面から、将来の学校規模を具体的に検証してほしい。

委員　：豊浜小学校のこどもたちは現状でも生き生きと活動しており、小規模であることを直ちにデメリットとは感じていない。現在、複式学級にはなっておらず、令和14年の将来推計も児童数70名と示されている。建設地もこの後の議事であり決まっていない。それ以上に、統合により太田川の橋を渡る通学が必要となることが不安である。スクールバスの利用やタブレットなど重い物を持っての通学も含め安全な通学手段を確保されるのか。豊浜小学校は津波避難の防災拠点、地域づくりの核でもある。これらも含め検討して欲しい。

会長　：この後の議事に関わってくる。Ａ型・Ｂ型の学府一体校の形態については、次回以降の検討内容になってくるので、まずは議事を進めたい。

（８）はまぼう学府の現状について【報告事項②】

事務局から資料３に基づき、福田小学校、豊浜小学校、福田中学校の施設・敷地条件、児童生徒数の推移、周辺の公共施設、学校と地域の連携状況、防災・ハザード等を説明した。

＜質疑応答・意見交換＞

会長　：敷地の問題、ハザードに関わる条件、多機能型学校とする際にどの施設を対象としていくか、そういった条件を整理する資料とされたい。

委員　：津波浸水区域図だけでなく、津波避難計画において避難指示区域が示されているので、津波警報発表時にどういった行動制限があるか確認が必要ではないか。

事務局：津波避難に関する条件も整理していくよう、ご意見として伺います。

会長　：浸水２ｍが想定されているが、１階が浸水することが想定される。建設できないというわけではなく、計画の中で考える必要がある。改めてこうした資料の情報を踏まえて施設の検討を進めていきたい。

（９）検討会の進め方について【協議事項①】

事務局から資料５に基づき、建設地、学府一体校の形態、施設の複合化の検討を進め、併せてアンケート及びワークショップによる意見聴取を実施することで、令和９年度中の基本構想・基本計画策定を目標とする検討会日程案について説明した。開催月、開催回数及び調査時期は検討状況に応じて調整する案である。

＜質疑応答・意見交換＞

会長　：進め方について質問や意見があればお願いしたい。市民ワークショップの提案については今後提案されるのか。

事務局：ワークショップの具体的な進め方は、次回以降の検討会で諮りたい。

委員　：１月頃の段階でこどもたちへアンケートを行うことは決まっているのか。こどもから先生方に質問を受けることが考えられるため、教職員には事前の説明が必要ではないか。

事務局：保護者や教職員にも趣旨を説明しながら進める計画である。

委員　：福田中学校ではすでにアンケートを実施しているが、改めてアンケートを行う必要があるか。

事務局：既存のアンケートの内容を確認し、重複しない形で必要な項目を検討したい。実施済みの調査結果を共有いただきたい。

会長　：福田中学校で実施したアンケートについては、事務局でも共有しているのか。

委員　：資料５の児童生徒アンケートに記載された項目と既存の調査内容が重なる部分があるため、確認してほしい。

会長　：既存のアンケート結果を確認し、重複を避けるため、実施スケジュールも含めて再検討してよいと思う。

事務局：既存調査の実施時期と内容を確認し、こどもたちの意見を把握するための方法を相談したい。

委員　：福田こども園でもアンケートを実施している。結果は手許に持っているので事務局へ共有する。

会長　：既存のアンケート結果を見て、無い情報を追加するか、実施していない小学校をどうするかなど検討したい。特にこどもたちへのアンケートは抽象的になるので、年齢に応じた質問の内容や範囲に配慮が必要である。ワークショップ案の進め方とあわせて次回までに事務局で検討してほしい。

委員　：検討会の進め方ではないが、豊浜地区から通学する場合は、悪天候や下校時間帯の暗さ、橋の歩道の狭さ等を考えると安全面に大きな不安がある。また、休日は釣り人もいることや不審者も懸念される。市で行った学習会の際に質問したが、検討会で議論していくとのことだった。検討会スケジュールの中で具体的に議論してほしい。

事務局：通学路や通学方法は、向陽学府の整備でも重要な課題となった。建設地やＡ型・Ｂ型の選択と密接に関わるため、今後の検討の中で十分に議論したい。

（10）建設地について【協議事項②】

事務局から資料６に基づき、学府の中心部に位置し、要望書で希望されている福田小学校敷地を建設地の検討対象とする案が示された。敷地の面積、道路への接続、こども園との近接、工事期間中の学校運営、液状化リスク等の条件について説明があった。

＜質疑応答・意見交換＞

会長　：前提として、今回建設地を決定しなければならないか。また、場合によって豊浜小学校を残してＢ型とすることも選択肢と考えて良いか。

事務局：令和９年度中の基本構想等策定を目指していくとなると、最初に候補地の方向性を決定していきたいと考えている。Ｂ型の可能性は否定していない。候補地としては既存の学校用地なのか、それ以外に取得が必要なのかということになる。

会長　：福田小学校、豊浜小学校、福田中学校の敷地条件、ハザード、通学、立地等を比較すると、事務局の案は福田小学校の敷地を基本に検討したいという趣旨であると理解している。ほかに意見はあるか。

委員　：豊浜小学校の保護者には、一体校がまだ先のことで実感しにくいという声もあるが、登下校の安全が確保されることが最優先である。市が実施した学習会では、国の基準で小学校は４キロを超える場合に通学支援があるということで、スクールバスは無いのかと思っている。福田こども園で行ったアンケートでは、回答39件のうちＡ型を望む回答が33件、Ｂ型が６件であった。Ａ型への期待は大きい一方、太田川を渡ることへの不安があるため、市としての考えを示してほしい。

事務局：学府一体校の形態がＡ型となる場合、現在の豊浜小学校に通う児童の通学方法が大きな課題になると認識している。形態に関わることなので、次回以降の議事として市としての考え方を整理し、説明していきたい。

会長　：Ａ型・Ｂ型の選択、豊浜小学校の扱い、スクールバス等の通学手段は引き続き検討する必要がある。他方、基本構想・基本計画を進めるうえで、検討対象の敷地については方向性を整理したい。他に懸念されることがあるか。福田小学校敷地を想定して計画を進めることでよいか。

全委員：異議なし。

（11）連絡事項・閉会

事務局から、次回の検討会をおおむね２か月後に開催することとして日程調整することに加え、会議開催の１か月前までには各委員に通知することを説明し、閉会した。

以上